



発行 一般社団法人徳洲会 〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階 TEL: 03-3262-3133

制作 一般社団法人徳洲会 広報部 TEL: 03-3268-5580 FAX: 03-3263-8125 Email: news@tokushukai.jp



ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS



号外

徳洲会体操クラブの杉野正堯主将&岡慎之助

パリ五輪体操男子での大奮闘を振り返る

岡は金3個と52年ぶり快挙・杉野も団体金に大きく貢献

体操ニッポンの大活躍に日本中が沸いたパリ五輪——。徳洲会体操クラブの杉野正堯主将と岡慎之助は、燦然と輝く金メダルを首にかけ、表彰台でスポットライトを浴びた。両選手は体操男子の日本代表として出場し、団体総合で金メダルを獲得。さらに岡は個人総合と種目別鉄棒でも金メダルの3冠という快挙を成し遂げ、種目別平行棒でも銅メダルを獲得した。杉野は種目別で、あん馬と鉄棒に出場し、それぞれ6位、7位の入賞。同クラブ創設以来、所属選手が五輪の個人総合で優勝したのは初。五輪の体操男子で日本が団体・個人・種目別を同一大会で制するのは52年ぶり、4個のメダル獲得は1984年のロサンゼルス大会以来となる40年ぶりの偉業だ。

世界のトップオフトップが勢ぞろいする実力伯仲の五輪という舞台。勝敗の分かれ目は、いつも紙一重だ。団体総合、個人総合ともに、金メダルの栄誉に浴した日本代表と岡と、銀メダルを獲得した国と選手とのポイント差は、団体総合で0.532、個人総合で0.233という僅差だった。

計画的で豊富な練習、ふだん通りのパフォーマンスを発揮する精神力や平常心、特別な環境のなかでも勝つために必要な自己コントロール、自らを鼓舞する気力など、さまざまな必要条件を満たしながらも、多くのアスリートは金メダルを獲得する十分条件を捉えきれず、競技場を後にする。「勝負は水物」、「勝負は時の運」と言われるゆえんだ。だが、パリ五輪で3冠を達成した岡は、弱冠20歳という若ささを存分に発揮しながら、各種目で完成度の高い、そして極端にミスが少ない演技を完遂した。その結果が3冠につながった。



個人総合の平行棒で会心の演技を見せる岡(写真:AFP/アフロ)

兆しは五輪前からあった。パリ五輪体操男子日本代表の内定を勝ち取った5月の第63回NHK杯で、岡は見事に個人総合優勝。徳洲会体操クラブの選手としてNHK杯を制するのは17年ぶりだ。あん馬で落下するミスがあったが、1日目(予選)を1位通過し、2日目(決勝)でも粘り強く安定した演技を披露。あん

馬以外の5種目で、すべて14点台をマークし、一度もトップを譲ることがなかった。パリ五輪個人総合の大舞台では、あん馬は決勝で全体の4位という上位の成績を収めた。修正力の高さが光る。

団体総合の大逆転劇に貢献

五輪団体総合の決勝では、1チーム5選手のうち、各種目(全6種目)で3選手が演技し、その合計点を競った。岡は、ゆか、つり輪、平行棒、鉄棒に出場。ふたりとも、すべて14点台をマークするなど、最終安定した演技を披露。杉野のあん馬は全体で2位タイ、鉄棒は3位タイ、岡のゆかは3位タイと上位の成績を残した。

日本は5種目目の終了時点で、トップの中国に3点以上離される苦しい展開だったが、最終種目の鉄棒で、トップバッターを務めた杉野が着地をびたりと止め、堂々の14.566をたたき出し勢いを付けると、岡も14.433の高得点を出すなどして大逆転。日本は五輪2大会ぶりに頂点に立ち、チームメイト全員で喜びを分かち合う姿が感動を呼んだ。徳洲会体操クラブ所属選手が五輪団体総合で金メダルを獲得するのは、米田功監督が現役選手だった2004年のアテネ大会以来、20年ぶりの快挙だ。

個人総合の決勝では、岡は2種目目のあん馬終了時点でトップに立ち、4種目目の跳馬終了時点には一時順位を3位にまで下げたが、5種目



団体総合のあん馬で華麗な演技を披露する杉野(写真:ロイター/アフロ)

目めに得意の平行棒で15.100の高得点を出し、再びトップに返り咲いた。最終種目の鉄棒でも、全体で2位の14.500という素晴らしい演技を披露。僅差で2位に付けていた選手の逆転を許さなかった。2位の選手には4種目で得点を上回られたものの、得意の種目で確実に高得点を出すとともに、粘り強くミスのない演技を重ね続けたことで、偉業を達成した。

種目別では杉野と岡は、それぞれ2種目に出場。すべて予選を突破し、上位8人が競う決勝に進出した。岡は体操競技の最終日に、まず平行棒で演技。最終の8番目に登場し、着地まできれいに決めると、15.300の高得点で銅メダルを獲得した。同種目で日本がメダルを獲得するのは、04年のアテネ大会以来の快挙だ。

その表彰式から約1時間半後には鉄棒で演技。2目目に登場した岡は平行棒同様、ミスなく着地もびたりと止め、14.533の高得点。3人目の座を明け渡すことはなかった。杉野は8月4日(日付は日本)に行われたあん馬で、ミスなく演技を終え14.933の高得点をマークし6位入賞。岡とともに出場した鉄棒では7位入賞を果たした。

試合後、岡はミスなく演技しきれたことや、一昨年に大けがを負ったが、その時から今大会に向け、しっ

かり準備してきたことが結果につながったと強調。帰国後の会見では「ひざを大けがした際には、多くの方に支援いただいた。それが力となり、今回の結果につながりました。感謝の気持ちを込めた演技ができたと思います」(岡)、「プレッシャーを負う場面で応援の声がひと押し、金メダルを獲得できました」(杉野)と、周囲の助力や応援に謝意を表した。

日本と五輪会場のあるフランスでは7時間の時差があるため、演技時間が日本では深夜だったにもかかわらず、注目度は非常に高く、徳洲会体操クラブのホームページへのアクセスも急増。団体総合決勝のあった7月30日は約5万6,000回(表示回数)、個人総合決勝の8月1日には約20万4,000回(同)、種目別鉄棒決勝の5日には6万7,000回(同)にもなった。

五輪にける強い思い ふたりともパリ五輪への出場と、そこでの活躍に向け、強い思いを抱いてきた。杉野は前回の東京五輪で代表入りを狙っていたが、最終種目で鉄棒でミスが出て、僅差で落選。目前でチャンスを逃した悔しさをバネに、米田監督と練習計画を何度も練り直しながら臨んだ結果、22年、23年の全日本シニア・マスターズ体操競技選手権大会の個人総合で連覇を果たすなど、結果を出した。今年の代表選考会で高難度の技を組み合わせた鉄棒と、あん馬の演技



個人総合で優勝し金メダルを手にする岡(写真:AFP/アフロ)

東上理事長が杉野主将と岡を祝福 「体操ニッポンを盛り上げて!」

徳洲会体操クラブの杉野正堯主将と岡慎之助が、徳洲会東京本部でパリ五輪の報告を行い、東上理事長が花束と祝福の言葉を贈った。まず「金メダルを持ち帰っていただき、ありがとうございます。米田監督はテレビ番組で解説をされていたが、とても良い解説でした」と3人の健闘をたたえた。「私自身は心配性で、選手の演技を観ていらませんでした。鉄棒から落ちたらどうしよう、あん馬で足を引っかけたらどうしよう、冷や冷やしていましたが、それも乗り越え苦勞でした」と振り返り、「岡選手は20歳ですが、4年後にはきっと日本の中心選手になっていると思います。杉野選手も4年後は29歳ですが、まだまだ現役です」とエール。

さらに「体操競技はけがが多いと思います。オリンピック選手は、恐らく常人以上のトレーニングをして、人間の身体能力を超えたところで頑張っていると思います。岡選手もけがに悩まされたと思いますが、結果は素晴らしいものでした」と祝福した。

最後に、徳田虎雄・名誉理事長の逝去にも触れ、「徳田先生は日本体操協会の会長として、体操ニッポンの復活に尽力されました。今後、日本の体操界は変わっていくと思いますが、米田監督率いる徳洲会体操クラブの未来も、とても楽しみです」と期待を寄せた。

「11月には、待ちに待った新しい体育館である『徳洲会ジムナスティクスアリーナ』がオープンします。『国際大会で活躍する一流選手が、トレーニングできる一流の施設をつくってください』と、米田監督に話して建設することになりました。『やっぱり徳洲会はずい』と、将来有望な若い選手が集まる拠点になってほしい。そして、体操ニッポンここにあり』と、盛り上げてほしいと思います」と熱く語った。



杉野主将(右)と岡(左)に、花束を贈り祝福の言葉をかける東上理事長(左)。その右は米田監督

徳田虎雄・名誉理事長 体操ニッポン復活に心血 徳洲会体操クラブの原点

徳田虎雄・名誉理事長は日本の医療だけでなく、体操界のレベル向上にも心血を注いだ。相次ぐ病院新設などで多忙を極めていた1996年、アトランタ五輪直後に徳田・名誉理事長(当時)は理事出立。日本体操協会会長に就任。当時、日本の体操界は低迷期にあった。

それまで日本は世界のトップクラスに君臨していた。五輪では52年のヘルシンキ大会から10大会連続でメダルを獲得(日本が不参加だった80年のモスクワ大会は除く)。とくに男子は60~70年代に五輪と世界体操競技選手権大会の二大会で、それぞれ団体総合5連覇(通算10連覇)を果たすなど、無類の強さを示し、「日本のお家芸」と認識されるようになった。

ところが、80年代に入ると強さに陰りが見え始め、ソウル五輪(88年)、バルセロナ五輪(92年)では金メダルはゼロ。その後のアトランタ五輪(96年)では、メダルが獲れず、強さの象徴だった男子団体総合は10位と、日本は同カテゴリーで過去最低の順位を記録した。

こうしたなか、徳田・名誉理事長は会長就任後、旧来の組織体制を刷新するなど協会改革を断行。強い思いで「体操ニッポン」の復活を目指した。また、会長就任から2年後の98年4月には徳洲会体操クラブを創設。朝礼に同クラブの選手を出席させるなど、心身ともに成熟した一流の人材育成に取り組んだ。2001年に会長職を辞したが、その後も体操界を支え続けた。

こうした努力が04年のアテネ五輪で実を結んだ。同クラブの米田功と水鳥寿忠が日本代表に選ばれ、男子団体総合で28年ぶりに栄冠をつかんだ。徳田・名誉理事長はアテネに向かう前の両選手に「金メダルを掴むつもりで鉄棒を掴め」という言葉を贈り、両選手が見事に応えた。

アテネ五輪後、徳田・名誉理事長は「驕れる者は久しからず」。過去の栄光に誇りを持つとともに、絶えず時代の流れに合わせ、先取りした体制をつくり続ける努力をしなければなりません(小紙431号「直言」)と綴っている。水鳥は現役引退後、リオ五輪(16年)からパリ五輪(24年)まで3大会で日本代表監督を務め、男子の団体総合で金メダル2個、銀メダル1個、個人総合で3連覇といった結果を導き出した。

米田は13年に監督として徳洲会体操クラブに戻り、2軍制の導入やジュニア世代への一貫支援など、それまでの体制や方法を改革。低迷していた同クラブを再建し、日本代表に所属選手を送り出した。今年11月には最新の技術・設備を導入した同クラブの新たな活動拠点「徳洲会ジムナスティクスアリーナ」が誕生、さらなる飛躍を後押しする。

「体操ニッポンの復活」に尽力した徳田・名誉理事長。その思いは今なお健在だ。



日本体操協会会長も務めるなど、体操界の発展に尽力した徳田・名誉理事長



種目別鉄棒で着地を決めガッツポーズする岡(写真:新華社/アフロ)



岡は種目別鉄棒も同じ3冠の快挙を達成(写真:ロイター/アフロ)



種目別平行棒で獲得した銅メダルを掲げる岡(写真:AFP/アフロ)

パールゴールドに輝く
徳洲会ジムナスティクスアリーナ
11月1日OPEN!!
国内最大級の男子体操専用体育館

体操に集中できる環境完備
天然木を使用し大開口を実現
街並みに自然に溶け込む外観

- 大会開催も可能なレベルの体操場は国内屈指の1,500㎡規模
- 風や音、温度差を意識せずに練習ができるふく射式空調を採用
- 食堂、コンディショニングルームなどで選手の体調を管理
- 子ども体操教室の練習場は選手の体操場と併設
- 一般の方向けのフィットネスクラブで地域の健康づくりに貢献

アクセス ■ 湘南モノレール「湘南深沢」駅から徒歩10分
所在地 ■ 神奈川県鎌倉市蓑田一丁目2-23

徳洲会体操クラブの詳細はこちら

杉野主将&岡インタビュー “夢の大舞台”に立って

Parler de la bataille de Paris

「五輪出場、金メダル獲得」。幼い頃からの夢をかなえた杉野正亮主将と岡慎之助。初の大会はどのよう映り、どのような思いで闘ったのか。両選手に話を聞いた。

—あらためて、おめでとうございます。それぞれ今回の五輪を振り返ると？

杉野・団体総合では予選、決勝を通じてノミズで演技することができ、自分の役割や与えられた仕事をききりとこなせたと思います。一方、種目別では悔しさを



感じた大会でした。あん馬では、ミスは出なかったものの世界との差を痛感しましたし、鉄棒に関してはメダルが獲れる立ち位置にしながらミスで逃しました。

予選（7月27日、日付は日本・以下同）から決勝（8月4、5日）までの期間が長く、調子の波を合わせる難しさも感じました。それでも、自分が目標にしていた場所に立てることは幸せでした。諦めずに、自分の目標に向かって挑戦して良かったと、あらためて思える大会でした。

岡・本当に記憶に残る大会になりましたし、自分の体操を知ってもらえ、しっかり評価してもらえた大会でした。国内での事前合宿の時に、感覚的に“しっくりくる”、“ガチッとほまる”体の動きができ、「これならいける」と手応えがありました。個人総合の優勝もずっと意識していました。ただ、今回、納得できた演技は団体総合のゆかた種目別の平行棒のみ。それ以外は、まだまだ手応えはありません。

—団体総合の決勝で、橋本大輝選手が最終種目の鉄棒を演技する前に、岡選手が涙を流していた姿が印象的でした。

岡・自分のやるべきことがきちんとできてホッとしたのと、金メダルが

体操競技がうまくいか、いかにいかはさておき、それでも前に進むためには強く目標をもって練習していかなくちゃいけない。それが使命だろうな。だからこそ自分の演技自体にもっと磨きをかけ、「究め研いでいくんだ」と。自分の演技に、神を宿すような作業を毎日繰り返していけば、もっとよくなるだろうし、目標にしている演技や場所につながるのではという趣旨でした。

心に刺さり、スマートフォンの待ち受け画面にしました。“究め研ぐ”という表現に“らしさ”が出ていますよね。兄はパリまで観に来てくれてうれしかったです。

岡・僕は、たとえば本のなかのフレーズです。アスリートに関する本を読むなかで、「マイナス発言は自分を後退させる」というフレーズに出会い、とても心に残りました。それまでは、多くはないもののネガティブな発言をすることもありました。その言葉に出会ってからは、パリに行く思いがすごく強くなり、きつい時でもマイナスな言葉は発していなかったと思います。

—団体総合の優勝をはじめ、国内は大いに盛り上がりました。現地でその様子を感じることはありましたか？

杉野・日本に関するニュースは、あまり入ってこなかったのですが、テレビなどではありませんが、SNSを更新した時に、大量のメッセージが届き、祝福されていると感じました。本当に追いきれないほどの数でした。

岡・僕も実感したのは SNS。本当にすごい数のコメントでした。「おめでとう」「すごく感動した」といった言葉を寄せていただき、頑張ってきた本当に良かったという思いと、観ている皆さんが感動するような演技ができたことを、うれしく思っています。自分たちの演技を見て、体操に興味を示すコメントもあり、とても良かったです。

—選手村での生活など現地の環境はどうでしたか？

杉野・練習が終わったら皆でリビングに集まって話したり、ゲームしたりしてオンとオフの切り替えは、うまくできていたと思います。

岡・オンとオフがしっかりできていたので、体のきつさもありませんでした。杉野主将が試合前に「緊張する」と、ずっと言ってきたので、「いけるぞ、いけるぞ」と励ましたりもしました。

—食事は？

杉野・何日かはメインダイニングに行っていたんですけど、日本棟から離れたところもあり、ほぼ利用しませんでした。日本棟から乾麺などを持参し、食べました。

岡・自分もほぼ利用しませんでした。日本棟でご飯、味噌汁、納豆を提供してくれる場所があったので、そういったところを利用しました。

—他の競技の選手との交流はありましたか？

杉野・今は研究者をしている2つ上の兄の言葉です。じつは僕にとって昨年が一番きつかった年で、「何をやっているんだ」と自分を責めることが、すごく多かった。僕の近くに住む兄と会った時、初めて弱音を吐く僕の姿を見て、SNSにメッセージを投稿してくれたのです。内容は、



杉野 正亮 主将

—帰国後、街で声をかけられたりしますか？

杉野・すごく声をかけられます。よく利用するコンビニで店員さんに「観ていました。おめでとうございます」と言われたのですが、自分が買うものがわかってしまうので、うれしい反面、照れくささもあります。

岡・パリでも顔バレして声をかけられました。

—帰国してから少しはゆっくりできましたか？

杉野・1日何も予定がない日はほとんどありません。まずは荷解きだけしてある五輪の荷物を片付けたいです。旅行に行って美味しいものを食べたいですね。

岡・とりあえずラーメンを食べに行きました。

—すでに2028年のロス五輪に向けて活動しています。決意をお願いします。

杉野・東京からのパリまでとは、また違う4年間になるとは思いますし、年齢的なこともあり、むしろこれからの4年間のほうが苦しいかもしれません。4年後、自分のなりたいものの、いたい場所といった思いや目標を、しっかりとちながら、そこから逆算して過ごしていけたら五輪の2連覇も目指せるし、今回はかなわなかった種目別でのメダルも獲得できるのではと思っています。五輪で金メダルを獲った経験など、いろいろなものを使いながら進んでいきたいです。

岡・自分の持ち味の体操を磨くのはもちろん、技の大きさや技のさばき方などにも一層磨きをかけ、力強い演技もできるし、きれいな体操もできる両方を兼ね備えた体操をしたいので、そこは連覇して、勝てる選手になりたいと思っています。

—最後に徳洲会の職員の方にメッセージを



米田 功 監督

「諦めずに闘いきる」大切さを体操界を牽引するクラブへ

パリ五輪で、杉野と岡が最高の結果をもたらしてくれました。予選終了時、「日本は最高の演技をしないと勝てないのでは……」と感じるほど、中国の強さが印象的でしたが、団体総合の決勝を見て、あらためて「諦めずに闘いきる」大切さを痛感しました。予選から決勝まで、日本の闘いぶりを見た多くの体操関係者の方から、杉野と岡をたたえる声が届きました。

両選手が活躍したポイントのひとつを挙げるとすれば、「入念な準備」と言えるかもしれません。昨年、ともにA代表をはずれてから、パリ五輪に向けては「日々の結果に一喜一憂しない」、「目の前のことに集中する」、「練習でも無駄な1本（1回の演技）を出さない。本番だと思って取り組む」ことを繰り返していました。五輪の舞台で力を発揮するために、とくに大事なことだったことと、また、日々のトレーニングは、選手と監督・コーチ陣が話し合い、目標設定や練習メニューを軌道修正しながら実施。選手の自主性を尊重しすぎず、必要な時には監督やコーチが積極的介入。以前から行っている当クラブの特徴的な取り組みです。

パリ五輪でも、WEB会議システムを活用し、現地の練習風景を収めた動画を共有しながら選手やコーチと話し合うとともに、「結果を求めるために、結果から離れる」、「1時間アップ、3分アップは本番を想定し、しっかりとやる」といったことを伝えました。

練習にパリ五輪仕様の器具導入

練習のための器具も鉄棒と平行棒は、パリ五輪仕様を導入。器具はメーカーなどによって、しなり具合や硬さが異なり、選手の実感に影響する可能性があります。今回の代表メンバーで杉野と岡だけが五輪未経験者。ふたりの、日本の最大目標でもある団体総合優勝で、勝負を決する最終2種目（平行棒と鉄棒）に絡むことがわかってきたため、できるだけことはしようと思いました。

ふだんの力が発揮できる環境づくりやトレーニングに尽力したことが、安定した演技に結び付いたのかもしれない。努力の積み重ねが結果、喜びよりも安心感のほうが強かったと記憶しています。

私が2004年のアテネ五輪で金メダルを手にした後、新たな世界が広がりました。杉野と岡も、これから経験していくことでしょう。彼らの喜ぶ姿を会場で見ながら、そうした経験をクラブのなかで継いでいけることに対し、しみじみ良かったです。

徳田・名誉理事長に良い報告

徳田虎雄・名誉理事長に良い報告ができます。生前、杉野と岡を連れてお会いし、逝去されたことを知った時も、パリ五輪での良い結果が報告できればいいなと思いました。思い返すと、私がアテネ五輪に向かう前、徳田・名誉理事長（当時は理事長）から「金メダルを掴むつもりで鉄棒を掴め」とメッセージをいただきましたが、まさに今回のパリ五輪は、そのような展開となりました。

また、「限界を少し超えたところに金メダルはある」との言葉もいただきました。私は「限界を少し超えたところ」に行くには、他者の力が必要だと思っています。選手時代、たとえばメディアが来ると緊張感で限界を超える、人の応援があると勇気づけられて限界を超えるといったことがありました。ふだん選手の世界観や練習に、私やコーチが積極的介入するのは、こうした考えに基づくものです。

徳田・名誉理事長からは監督就任時に「体操界全体のことも考えてほしい」と言われました。ゴールドメダリストがいる今、当クラブの強化だけでなく、もうひとつ上のステージに上がったら良いと思っています。体操界を牽引するようなチームになれるよう、今後も努力を重ねます。（談）

クラブの練習場には徳田・名誉理事長から贈られたメッセージが掲示



新宅 裕也 ヘッドコーチ

“止まらないエネルギー”に期待 国内の代表合宿など短期間で成長

代表チームのコーチとして初めて五輪を経験しました。5月のNHK杯で代表メンバーが決まり、その2週間後から隔週で代表合宿が組まれました。この国内での代表合宿が正亮と慎之助にとって、ひとつ良かったと思います。金メダルを獲得するために見直すべき点を明確にし、重圧を感じながら練習できました。苦しかったと思いますが、フランスに渡った時は、たくましさを感じました。

パリに移動した後も正亮と慎之助の動きは良く、ポディウム練習（本番と同じ会場と器具を使用した公開練習）でふたりとも出場種目をミスなく演技できたのを見て「行けるかな」と個人的には手応えを感じていました。

迎えた本番。予選の結果、団体総合で日本は中国に次ぐ2位。決勝の前日ミーティングでは、代表キャプテンの萱和磨選手（セントラルスポーツ）が切り出し、東京五輪で2位に終わった悔しさ、金メダルへの思いを口にし、各選手も思いを吐露しました。その場の空気が一気に変わり、選手もスタッフも皆が「必ず金メダルを獲る」とスイッチが入ったと思います。ご存じのように、決勝では、選手の諦めない気持ちが実を結びました。

結局、その後の個人総合、種目別でも正亮と慎之助にとって最大の目標としていた「ミスなく演じることが勝負のポイントになりました。あれほどの偉業を成し遂げた慎之助は帰国後、「あれとあの技をやりたいんです」と急に言ってくるなど、歩みを止めることがありません。かつて私は日本体育大学のコーチとして、内村航平選手のそばにいましたが、彼は出場した北京五輪後すぐに体育館に現れました。そうした「止まらないエネルギー」が慎之助にも見られ、とても楽しみます。当クラブの他の選手がそこに食らいつき、ひとりでも多く代表に入ってほしいと思います。ヘッドコーチとして、この結果を誇りに、前に進み続け、周囲の方々やファンの方たちを魅了するクラブにしていきたいです。（談）

徳洲会体操クラブの歩み 五輪代表を多数輩出！一流の人材育成目指す

「徳洲会体操クラブ」の創部は1998年4月。徳田虎雄・名誉理事長（当時理事長）が、体操ニッポンの復活と一流の人材育成を目指し、設立した。初代監督に監物永三氏を迎え、アトランタ五輪（96年）代表の田中光ら6人のメンバーで活動を開始。シドニー五輪（2000年）では藤田健一、笠松昭宏が代表入りし、団体総合で4位を記録した。

当初は都内の日本体育大学を拠点に活動していたが、01年10月に国立スポーツ科学センター（東京都）がオープンすると、活動拠点を同センターに変更。02年、2代目監督に立花泰則氏が就任した。

アテネ五輪（04年）に米田功、水鳥寿恵が出場し、団体総合では日本にとって28年ぶりの金メダル獲得に貢献した。これをきっかけに07年、念願だった徳洲会体操クラブ専用の練習場「徳洲会スポーツセンターかまくら」が神奈川県にオープンした。

北京五輪（08年）には中瀬卓也が出場し、団体総合で銀、ロンドン五輪（12年）には田中和仁が出場、団体総合で銀を手中に収めた。13年1月、3代目の米田監督が就任し、選手の意識改革をはじめクラブ強化に努めた。

東京五輪（21年）では北園文珠と亀山耕平が代表入りし、北園は団体総合で銀メダルを獲得した。パリ五輪（24年）には杉野正亮と岡慎之助が出場、ともに団体総合で金メダルを勝ち取り貢献した。さらに岡は個人総合でも金メダルを獲得、5輪で個人総合優勝するのはクラブ初。岡の快進撃は止まらず、種目別の鉄棒で金、平行棒で銅メダルと、出場したすべてのカテゴリーで表彰台に立った。五輪の男子体操で日本勢が団体・個人・種目別を1大会で制したのは1972年のミュンヘン五輪以来、じつに52年ぶり。

同クラブは五輪以外に、世界体操競技選手権大会での日本代表としてメダルを獲得した選手を輩出。日本を決める全日本体操競技選手権大会では、とくに団体総合で5連覇を成し遂げるなど国内外で輝かしい成績を残している。今年11月にはクラブの新たな活動拠点として、国内最大級の男子体操専用体育館「徳洲会ジムナスティクスアリーナ」が開館し、一層の飛躍が期待される。

仲間も発奮！日本代表入り目指し 切磋琢磨

チーム全体の士気が向上 高橋 一矢 副主将

同じチームの一員として、杉野主将と岡の大活躍ぶりは、とても誇らしい思いです。多くの夢や感動を与え、心から、おめでとうと祝福する気持ちです。彼らの姿を見て、チーム全体に「次は自分だ」という雰囲気が出て、士気も大きく上がりました。自分は来年、種目別の世界選手権で代表の座をしっかり勝ち取り、ふたりの金メダルに続けられたらと思っています。

A代表で活躍し続けロス五輪へ 川上 翔平

主将の正亮さんと、自分と同じ年の慎之助が闘っている姿を祝福する気持ちと

ともに、悔しい思いで見せていました。その悔しさは、今の練習に生かすことができていて、自分の体操のレベルが上がっていると思います。練習に対する答え合わせを、9月の国民スポーツ大会（旧・国民体育大会）とジャパンオープンでできた良いと思います。

これからの4年間、世界選手権の日本代表に入り続けるなどA代表で活躍し、「そのまま川上が代表に入りロス五輪に行くだろう」と思われる選手になれるよう頑張ります。ロスでは団体総合、個人総合、個人種目別の鉄棒で金メダルを目指します。

4年後に向け自分をつくり直す 北園 文珠

今回のパリ五輪で、東京五輪の団体総合に出た自分以外のメンバー（橋本大輝選手、萱和磨選手、谷川航選手）は、雪辱を果たせましたが、そこに自分がないことが、すごく悔しくて、正直、喜びきれないと思います。

試合は練習の「答え合わせ」。それまでの練習が思うようにでき、ものすごく練習したから五輪という舞台でメダルを獲れたのだと思います。これからの4年間、自分をもう一度、つくり直さないとはいけなと思います。エー

スとして、日本の体操を引っ張っていきけるような選手になりたいです。

けがしても戻れること証明 藤巻 峻平

慎之助とは、同じ時期に同じ右膝前十字韌帯断裂を経験。同じ病院で同じリハビリメニューを一緒に進めていました。自分がパリ五輪に出て「けがしても選手として戻れる」と証明したのですが、慎之助が演技を通じ、そのメッセージを世界に発信してくれました。それがすごくうれしかったです。団体総合で勝った時に、LINEで「個人総合も（金メダルを）獲っちゃってね」と連絡したら、本当に喜び、「種目別も獲ってきて」と連絡したら、また獲るなど、驚きの連続でした。自分も、見てくださる皆さんに勇気や感動、希望を届けたいです。

慎之助に勝って代表入りを 松見 一希

五輪代表を目指して、この3年間取り組んできました。届かなかった場所からチームメイトがメダルを獲ったことはうれしいですが、やはり自

分が出ていない悔しさもあります。慎之助に勝てば世界一となるので、来年はぜひ勝って、世界選手権の日本代表となり、個人総合で優勝を目指したいです。

東京五輪の悔しさ思い出す 米倉 英信

とくに自分と同じ東京五輪で補欠だった杉野主将が、自分が果たせなかった代表選出、金メダル獲得を成し遂げて、うれしかったです。4年に1回の五輪で勝つためには、本人の実力はもちろん、周囲を巻き込む力やタイミングなど、さまざまな要素が必要です。

本当にひと握りの人しか見られない世界だと感じましたし、東京五輪に出られなかった悔しさを思い出しました。来年、世界選手権があるので代表として闘えるように頑張ります。

同期の活躍に喜びと悔しさ 石澤 大翔

同じクラブの所属の選手が五輪に出て、しかもメダルを獲って帰ってきた喜びがある反面、慎之助は同じタイミングで入職した同期であるため、悔しさもあります。一層頑張るきっかけになった五輪でした。来年は得意のあん馬で世界選手権の代表入りを目指します。

自分が所属するチームの選手が五輪に出場したことはなかったため、身近な仲間が出ていくのを見て感動しました。自分の限界を決めることなく、ロス五輪を目指して1年1年を大切に闘い、自分もふたりのように輝きたいです。

限界決めず1年1年を大事に 長谷川 毅

今まで自分が所属するチームの選手が五輪に出場したことはなかったため、身近な仲間が出ていくのを見て感動しました。自分の限界を決めることなく、ロス五輪を目指して1年1年を大切に闘い、自分もふたりのように輝きたいです。

自分もあの舞台に立ちたい 上山 廉太郎

正亮さんとは大学生の頃から一緒に練習して、近い関係の選手が金メダルを手にして、そのすごさを一層実感しました。同時に、「自分もあの舞台に立ちたい」という気持ちが高まりました。今回の正亮さんのように自分も種目別で代表を狙い、強みであるゆか、つり輪、跳馬に磨きをかけます。